
ミツバチ

遊己

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミツバチ

【Nコード】

N7293A

【作者名】

遊己

【あらすじ】

1人の働き者の女と、1人のヒモのような男のお話。

蜂が飛んでた。

ミツバチだ。

働き者のミツバチが花の回りをブンブン飛んでる。

それをぼくと眺めていた。

私みたい・・・

そんな事を考えながら・・・。

「由香李」

宋太が私を呼ぶ。

「何？ご飯？」

「違う。こっち来て」

宋太はリビングでソファーに半分寝転んで手招きしてる。

こういう時はろくな事がない・・・。

宋太に近づいて下に座る。

その途端に抱きしめられる。

「何・・・？」

「ん？何となく。由香李の温もりが欲しくてねえ〜」

軽い男。

毎回毎回こんな風に甘えてくる。

子供のように甘えたら何でも言う事を聞いてくれると思ってる。

きいてしまう私もいけないんだろうけど・・・。

「腹減った」

数十分後、ベッドでまどろみながら宋太が言う。

「解った。何食べたい？」

「こつてりしてないもの。俺、疲れちゃったから」

「じゃあ、冷やし中華でも作るわ」

「いいね。出来たら呼んでよ」

疲れてるのは宋太だけじゃない。

宋太は仕事もしてなくて、家でゴロゴロしてるだけなのに。

時々日雇いでバイトをしてるみたいだけど・・・。

そのお金もどこに消えてるのが全く家には入れてはくれない。

家賃と光熱費、それに宋太のお小遣い。

それだけを稼ぐのは大変だけど、宋太の為に頑張っていた。

16の時に20歳の宋太と駆け落ちした。

その時の宋太はこんなのじゃなかった。

もっと澁刺としてた。

仕事もきつちりこなしてくれた。

いつからだろう。宋太が変わったのは。

宋太は急に仕事を辞めてきた。

何の相談もなく、本当に急に辞めてしまった。

徐々に傍若無人になってきて、甘えん坊になってきて・・・今では

もう子供みたいになっちゃってる。

ワガママを言われて、好きだからってだけで何でも言う事をきいて

しまったのが駄目だったのは解ってる。

家でゴロゴロしてても、文句を言うつもりは無い。

宋太に離れて行かれたら・・・宋太のいなかった時期が思い出せない

いくらい、宋太がいる毎日が浸透してしまっている。

宋太の世話をするのが私の生き甲斐になってしまったのかもしれない。

い。

「宋太、出来たよ」

「あいよ」

冷やし中華とスープ、サラダを添えてテーブルに並べる。

1DK。狭い部屋なんだから言わなくても解るだろうに・・・

言わないと絶対にベッドから出てこないんだから。

美味しい美味しいとズルズルと食べて行く宋太。

宋太のこういう所は好きだな。

口に合わない時は本当に不味いって言うのが玉にキズだけど……。

宋太が甘えてくる時、それは小遣いをねだる時。

毎月渡してる分じゃ足りなくて、無くなったら私に甘える。

財布から勝手に出していかないだけマシ。

そう思うしかない。

今日も結局私の財布からは諭吉さんが3枚宋太の財布へ消えていった。

こんな生活をかれこれ3年間は続けている。

疲れるけど、文句を言いたくなる時もあるけど、これはこれで幸せなんだと思っていた。

宋太は私がいなかったら生きてはいけない。

それを実感できるから、私は頑張って働くし、家事も全部こなす。それで宋太が私から離れないんだったらお安い御用だと思っから。

ある時、宋太が言った。

「オレ、こっから出て行こうと思う」

頭が真っ白になった。

「このままじゃオレ、駄目になるから」

今更？って思った。

「由香李と一緒にいたら、オレ、甘えちゃうから」

私がいけないの……？

「もう26だし、そろそろ自立しなくちゃって思って」

自分勝手だ……！！

猛烈に反対した。

何時間もずっと言ひ合いをいた。

宋太は私がいなかったら生きていけない。

仕事なんかここ何年もしてないじゃない。

宋太が一人で生きていくなんて・・・そんなの出来るわけが無い。
何時間もかけて説得した。

それでも宋太の気持ちは変わらなかった。

静かに穏やかに、否定し続けた。

決して私の意見に首を縦には振らなかった・・・。

宋太が出て行くと言ってから2週間後

本当に宋太は出て行ってしまった。

私が仕事に出てる間に、置手紙だけを残して・・・。

『由香李へ

今までありがとう。

由香李がいたから、オレは今まで生きてこれた。

でも、このままじゃ、あまりにも男として情けないって思ったんだ。

由香李という間は本当に楽だったよ。

何もしなくても全てが揃えられて、オレはなにもしなくても生きて
る事ができたから。

今になって漸くそう思う。

やつと思う事が出来た。

次に会うときは必ずひとり立ちした男になってるから。

その時にまだお前が一人で、まだオレに気持ちを残していてくれる
なら・・・。

待つてくれなんてカッコいいことは言えないけど、せめて忘れな
いでいて。

由香李に忘れられるのが一番つらいから・・・。

オレは由香李を忘れない。

またいつかお前に会いたい。

信じないだろうけど、オレはお前の事がこの世の中で一番好きだよ。

今も昔もずっと由香李だけを見てた。

その事は、無理かもしれないけど信じて欲しい。

いつかどこかでまた会える事を祈ってる。
本当に今までありがとう。

これからは自分の為の人生を送ってくれ。

宋太』

不思議と涙は出なくって・・・宋太がいなかったの今までの部屋が
やたら広く感じられた。

宋太は家具とかには一切手をつけずに出て行ったみたいだ。
何も無くなってはいない。

ただそこに、宋太だけがない。

帰るとかならずソコにいた宋太がない。

「お帰り」

と微笑んで出迎えてくれた彼が・・・彼だけがない。

悲しい、とか、寂しい、とか言う感情じゃない。

耐え難いほどの虚無感が私を襲う。

これから私はどうやって生きていけば良い？

何のために働くの？

自分の為の人生って何？

自分の為に何かをするって・・・どうすれば良いの・・・？

食べ物や喉を通らず、眠る事さえ出来ない日々が何日か続いた。

仕事にいく理由も見いだせなくて、無断欠勤を続けている。

きっともう解雇処分になっているだろう。

ずっとずっと考えた。

手紙の最後の一文。

『これからは自分の為の人生を送ってくれ』

この一言が・・・私には引っかけかかって仕方が無かった。

私は自分の為に生きる事をしてなかった。

でも、何でそれを宋太が心配する必要があるの・・・？

宋太の為に生きる事は、してはいけない事だったのだろうか・・・？

もしも・・・これが逆の立場だったら、私はどう思うんだろう・・・。

宋太が毎日働いてきたお金で生活する。

私は家事すらしないで、彼に甘えたつきりで・・・。

宋太の人生は私の物のようになってしまっていて・・・。

ワガママも全て受け入れてくれる。

そう、最初は最高かもしれない。

甘えるだけ甘えて、最高の恋人を持ったと誇りにすら思つかもされない。

でも、ソレが3年間も続いたら・・・。

・・・私も、宋太と同じ事をするかもしれない・・・。

宋太の人生は、宋太が選ぶものだ。

私が宋太の人生をどうこうして良いものじゃない。

そうか・・・。

宋太は、私に私らしく生きて欲しかったのかもしれない。

私なら、宋太には、宋太らしく生きて欲しいと思うから・・・。

宋太の為に働くんじゃない。

自分の為に働いて、自分の為に生きるんだ。

一年後。私は何とか、昔したかった仕事をする事が出来ている。

自分らしく生きてみるのは、人の為と思って、気持ちを押し売りするよりも遥かに難しい。

でも、前の仕事よりも遥かに楽しいと思える。

宋太が気付かせてくれた楽しさだと思う。

宋太は言っていた。

『由香李に忘れられるのが一番つらいから・・・。』
バカだね。

こんな楽しい事知っちゃったら、もう宋太のことなんて忘れてしま
いそうだよ。

早く迎えに来ないと、本当に忘れちゃうぞ。

宋太のサラサラだった髪も

宋太のキラキラしてた瞳も

宋太の笑うとえくぼが出来る可愛らしい頬も

宋太の私の体がスッポリ隠れちゃうような大きな背中も

宋太の抱きしめる時の力強さも

宋太の良く甘えられた時のずる賢そうな表情も

わがままや嘔吐きなところも

そして、目一杯幸せな時に見せた笑顔も・・・

全部忘れちゃうぞ！

もしも、まだ私の事を前のまま愛してくれているなら、早く迎えに
来て。

どうでも良くなってないのなら、ひとり立ちしたかつこいい宋太を
私に見せて。

そしたら私も見せてあげる。

私が私らしく生きている所を。

そして、言ってあげる。

私はまだ、宋太の事が好きだよって、今ならまだ言ってあげる。

昔は、宋太の巣に、せっせと蜜を運んで、巣を作っていた。

今は、私の巣に、蜜を運んで、私の巣を作っている。

そんな私の巣に、いつか宋太の巣を合体させて、大きな大きな巣を
作りたいね。

2人のミツバチが作る巣は、きつと1人で作った巣よりも居心地が
良いんだろうな。

（後書き）

最後まで読んでくださってありがとうございました。

ほのぼのしたものが書きなくなりました。

ちゃんとほのぼのした物になっているかどうかは解りませんが・・・。

なんとなく、ホッとした気持ちになって下されば幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7293a/>

ミツバチ

2010年12月31日05時56分発行